

保育者が子ども同士の間関係形成に与える影響

山内 文菜

I 問題と目的

文部科学省初等中等教育局児童生徒課が出している、「平成24年度 児童生徒の問題行動等 生徒指導上の諸問題に関する調査について」では、いじめの認知件数は昨年より上昇している。筆者はこのような実態を、いじめの被害者・加害者の両者に、人と関わる上での能力に何らかの問題が生じていると考える。そのような能力は、幼児期に養われ、身につけていくべきものであり、そのためには教師・保育士の援助が不可欠であると考えられる。

良好な人間関係形成のためにどのように保育者が子どもに対して援助を行っているのか、どのようなねらいをもって関わっているのか疑問に思い、「人間関係」の領域について研究していきたいと考えた。

II 研究内容

1. アンケート調査

研究方法

<調査日時> 2014年9月～10月

<調査対象> A県B市の公立の幼稚園16園、保育園10園の担任をもつ教師・保育士(以下より保育者)

<調査目的> 現場の保育者は子ども同士の良好な人間関係形成のため、身につけるべきことや態度はどのようなものだと考えているか、年齢ごとの差や経験年数における差を比較するために行う。

<アンケート内容> 質問は4項目あり、担任している年齢の子どもに対する援助において、普段気を付けていること、意図して行っている活動、保育経験の中で子ども同士の関係が深まった瞬間について問うた。アンケートの選択項目については、幼稚園教育要領解説「人間関係」のねらいと内容から、築くべきこと、身につけるべき態度を考察し抽出した。また、予備調査を行い、選択項目の捉え方に差異が生じてしまわないように言葉を修正した。

結果と考察

質問1 担当している年齢での保育において、人間関係形成のために身につけるべきことはどのようなことだとお考えですか。5つ選択してください。

A 保育者との信頼関係

B 他者の存在意識や関心

C 自分の力でやってみようとする

D 自信

E 喜怒哀楽などの多様な感情体験

F 自己主張をし、思いを相手に伝えること

G 自己抑制ができること

H 自己と他者の考え方の違いに気付くこと

I 特定の相手が喜ぶことをすること

J 困っている相手に手を差し伸べ慰めること

K 初めての相手と話し、ともにあそぶこと

L 遊びの中でルールを守ろうとすること

質問2 1で答えていただいた内容を育てるために、行っている活動(遊びなど)はどのようなものかご記入ください。また、その活動は1で答えていただいた項目のどれに当たるかご記入ください。

質問1では、担当年齢によって回答結果に差がでるかどうかが比較した。質問2の回答と合わせてAから順に考察していく。

A 保育者との信頼関係 は担当年齢が上がるごとに割合が低くなっている。具体的に行っている活動として、ふれあい遊びなどが回答にあったが、製作遊びや砂遊びなどの遊びも保育者との信頼関係を形成するために行っている活動として挙がっていた。特定の大人との信頼関係の形成は、乳児期には保育園での生活に慣れるため、安心して生活できるようにする意図もあるが、保育者との信頼関係を形成することで、幼児期の人間関係形成の基盤になることが分かった。

B 他者の存在意識や関心 は担当年齢1歳児の回答において割合が少し減少するが、乳児には保育者が他児と関わる場所を見せたり、遊びの中で「待つ」ことを経験させたりしていると

いう回答があった。幼児には「友達と二人組で行うふれあい遊び」「クラス全員で手を繋いだり、歌をうたったりする」活動などを通して、友達の存在意識や関心を高めていくことを意識しているという回答を得た。乳児にとって、他児の存在に気付くことは保育者の援助によっては可能であることが分かる。

C 自分の力でやってみようとすることは担当年齢3歳児から、年齢が上がるごとに割合が低くなっている。担当年齢1歳児の回答に、「簡単な身の回りのことを自分でできるよう援助する」という回答があったため、乳児期に自分でできることが増えることで育まれると考察する。しかし、幼児期にも、「製作」「砂遊び」「給食の配膳など、毎日行うことを少しずつ増やす」「自分なりに頑張っていけばできるようになり自信がつく遊びを取り入れたりしている」という回答があった。幼児期には遊びの中で自分の力でやってみようという思いが育まれることが分かる。

D 自信は担当年齢1～4歳児における割合は36%～45%の間であり、あまり差はない。しかし、担当年齢5歳児で70%に上昇する。意識して行っている活動として、Cで述べた回答と同じ、「簡単な身の回りのことを自分でできるよう援助する」という回答が担当年齢1歳児の回答であったが、担当年齢3歳児の回答では、「製作」「給食の配膳など、毎日行うことを少しずつ増やす」、担当年齢4歳児の回答では、「ごっこ遊び」「巧技台を使用した遊び」、担当年齢5歳児の回答では、「リレー遊び」「自分なりに頑張っていけばできるようになり、自信につながる遊び(目標を記入できるがんばりカードを作る)」「役割分担」「友達のいいところや、出来事をみんなの前で話す」「みんなで決める場を設ける」という回答があった。3、4歳児では遊びや毎日の活動から、5歳児では保育者が意図して設けた時間や媒体を通して、育まれていることが分かる。

E 喜怒哀楽などの多様な感情体験は担当年齢0歳児の割合が100%となっており、担当年齢が上がるごとに割合が低くなっている。担当年齢0歳児では、「思い切り体を動かせる遊び」「絵本を見たり、童謡や体操の音楽を流したりする」という、気持ちを表出し感性を育てる活動を行

っている。担当年齢1歳児では、「1対1のふれあい遊び」「名前を呼ぶ歌をうたう」「絵本の登場人物の表情を説明する」など、様々な感情を理解できるような働きかけをしている。担当年齢2歳児では、「簡単な身の回りのことを自分でできるよう援助する」「みんなで虫探しをする」という回答から、友達と少しずつ関わっていく中で、様々な感情体験ができることが分かる。担当年齢3歳児の回答では、「絵本や紙芝居を通して、約束事を伝えたり、感情体験につなげたりする」という回答があり、その他は、遊びの中で友達と関わり、様々な感情を経験できることが分かる。

F 自己主張をし、思いを相手に伝えることは全体的にあまり差がないが、担当年齢3～5歳児の質問2の回答に多く挙がっている。乳児期には、「特定の保育者が関わる」「名前を呼ぶ歌をうたう」「絵本の登場人物の表情を説明する」という回答があり、幼児期には「友達と二人組でふれあい遊び」「ルールのある遊び」「ごっこ遊び」「リレー遊び」などがある。

G 自己抑制ができることは全体的に割合が低い。担当年齢乳児の質問2の回答に全く挙がっていない。しかし、担当年齢幼児の回答には挙がってきており、「ルールのある遊び」「ごっこ遊び」「リレー遊び」などがあった。ルールのある遊びでは、我慢することが生じる。年齢が上がるとお互いに我慢することができ、そうすることで遊びが楽しくなることを理解できるようになってくることが分かる。

H 自己と他者の考えの違いに気付くことは担当年齢0歳児の回答として「同じおもちゃをいくつか用意し、自分のものを確保して遊べるようにする」という回答があった。担当年齢幼児の回答では、「ごっこ遊び」「ままごと」「表現遊び」などの遊びや、「みんなで決める場を設ける」といった回答があった。数人で遊ぶことでイメージの違いやルールの違いが出てくるため、そのようなときにみんなで解決できるようにという意図があることが分かる。

I 特定の相手が喜ぶことをするは選択している回答はあったが、質問2の回答に挙げられていなかった。特定の相手が喜ぶことが分かるということは他の選択肢に置き換えられるため、「喜ぶこと」と限定されたこの選択肢は選ばれ

なかったと考えられる。

J 困っている相手に手を差し伸べ、慰めるは全体的に割合は低いが、担当年齢が上がるごとに割合が少し高くなっている。担当年齢 0～3 歳児では、質問 2 の回答に挙がっていない。しかし、担当年齢 4、5 歳児の回答では「製作」「ままごと」「ブロック」「絵本を読んだ後にどう思ったか言ったり聞いたりする場を作る」という回答があり、遊びの中で困ったことが生じたときに友達を助けたり、手伝ったりすることができる。また、絵本の登場人物の気持ちを考えることで、他者の気持ちを考えることができるかと考察する。

K 初めての相手(顔見知り程度の園内の子)と話し、ともに遊ぶことは担当年齢 2、3 歳児の回答にのみ選択されており、「友達と二人組で行うふれあい遊び」が質問 2 の回答に挙がっていた。友達の存在を意識するために行われており、友達と肌と肌で触れ合うことが意図されていると考えられる。

L 遊びの中でルールを守ろうとすることは担当年齢 4 歳児のみ割合が 50%を超えている。しかし、乳児期においても「遊びの中で“待つ”ことを経験させる」という回答があり、幼児期にルールを守ることにつながるような活動を行っていることが分かる。幼児期には、ルールのある遊びを行うことで、ルールを守ることでもみんなが楽しく遊べるのが徐々に理解できるようになると分かる。

担当年齢乳児の保育士の回答があまり得られず、有効票に年齢ごとの差が生じたため、割合にもずれが生じているように見える。また、乳児期に育てるべき項目が選択肢の中に 5 つもなかったようで、担当年齢乳児のアンケートの選択肢には考慮が必要であった。経験年数と選択した項目との関係は特に差異や傾向はなく、保育の経験によって変化はないものと考えられる。

質問 3 1 で答えていただいた内容を育てるために、あなたが日頃から気を付けたり、意識したりしていること(遊びやケンカの中での声かけや行動など)はどのようなことかご記入ください。

質問 3 では、日頃から気を付けていることはどのようなことがあるか問うた。その中で得られた回答を 6 つのカテゴリーに分類した。

- ①心身ともに安心できる配慮
- ②子どもの成長に合わせる
- ③仲介・代弁
- ④自信
- ⑤他者への意識づけ
- ⑥保育者の在り方

結果として、回答数の多いカテゴリーは年齢ごとに違ったが、0～5 歳のうち 0、3、4、5 歳において「心身ともに安心できる配慮」が多く回答されている。どの年齢においても大切であると考えられていることが分かり、保育者が意識して行っている基本的な援助と言える。

また、「他者への意識づけ」は 2～5 歳において割合が上がっており、質問 1 の B 他者の存在意識や関心の項目と同様のことが言える。

質問 4 あなたの保育経験のなかで、子ども同士の人間関係・友達関係がぐっと深まった事例をご記入ください。

- 仲が良いがゆえに、よく喧嘩をする二人は、思いを言い合えるが、受け入れることができなかった。「これだけ自分の思っていることを言えるのって、すごく仲が良いからだよ。相手の考えを聞いて、そこから何かいい方法が見つかったら 1 人の考えより素敵になりそうだよ。」と投げかけると、表情が和らぎ、相手の思いに耳を傾けられるようになった。(5 歳児 6 年目)

この事例は子どもたち自身の成長により、他児の成長が促されており、お互いの思いを伝えられるようになり、言い方が強くなってしまいうこともあるため、そのような時に保育者の声かけが必要である。様々な経験や、たくさんの友達と関わっていく中で、多様な考え方ができたり、相手の気持ちになって考えることができるようになってきていると言える行動である。

2. 観察 研究方法

<調査日時> 2014 年 5 月 9 日～12 月 19 日の 8 か月間の毎週金曜日

<調査対象> A 県 B 市 C 幼稚園 二人の 4 歳女兒(a 児、b 児)

<調査目的> 4 歳児における保育において、研究 I のアンケートの 3 つ目の質問項目、「保育者が日頃から気を付けていること」が実際

の現場でどのような言葉や行動となっているのか観察し、結果的に子どもがどのように変化しているのか考察することを目的とする。

＜調査内容＞ a 児と b 児の関係性の変化や、それに関わる教師の様子や意図を観察する。また、担任教師に、その週の二人について変化があったかどうかインタビューを行った。

結果と考察

a 児と b 児の背景と日頃の様子を簡単に記す。

a 児には幼い弟がおり、母親の仕事の関係で 9 月頃から預かり保育を希望していた。はじめは嫌がり泣くこともあったが、担任教師の援助や声かけにより、少し落ち着いてきていた。また、年長から保育園への転園の話も出ており、クラスの友達や担任教師と離れることに寂しさを感じているようにも見えた。

b 児の母親はおなかに子どもを授かっており、姉としての意識が少しずつ芽生えてきたように見えた。b 児は a 児に対し自己主張が強く、なんでもはっきり言える関係であった。

a 児と b 児は年少クラスの頃から仲が良く、b 児に絵の描き方などを教えてあげたり、遊びを先導したりするのは、いつも a 児であった。a 児は他児と関わることもあるが、遊びの内容や興味が最も合うのは b 児であった。しかし、b 児に嫌なことをされたり喧嘩になったりしても、先に謝るのは a 児であった。

ある日の喧嘩の中で、a 児は b 児に対し、「どうして幼稚園でも我慢しなきゃいけないの」と、幼い弟がいることにより家でも我慢せざるを得ない状況に耐えかねているようだった。b 児に初めて本音をぶつけたが、b 児も譲らず、お互い言い合った。その際、教師はお互いに納得のできる解決方法を提案し、二人はその通りにしたが、仲直りとは言い切れない状況であった。

そこで、別の日のけんかの際、教師が「二人とも相手のこと好きなら、お互いのことを考えてみたらどう？」と提案したことで、新しい解決方法を見つけだしたように、取り合っていたものを譲り合ったようである。

a 児と b 児は、言いたいことを言い合えるようになり、お互いに言い方がきつくなってしまうことがあった。そのような二人に関わる際、担任教師は、「そんな言い方されると嫌な気持ち

になるな。」「優しい言い方をしたら、b ちゃんも分かってくれるんじゃないかな。」と声をかけていた。このような担任教師の行動は、研究 I のカテゴリー分類では、仲介・代弁に入るが、その中でも意識されていることがあり、年齢に応じて違いがあると考えられる。今回の研究の対象年齢である 4 歳児においては、保育者の毎日の子ども同士の仲介や気持ちの代弁から、他者の気持ちを理解できるようになってきているが、大好きな仲のいい友達だからこそはつきり言い合え、喧嘩が増えてきている。思いのままに遊ぶ友達であるという認識を、仲介する中で保育者が気付かせてあげなければならない。様々な考えや気持ちがあることを、少しずつ教えていく必要があると考えられる。毎日の友達との関わりの積み重ねによって、子どもたちだけで解決できるようになっていく。

III まとめ

アンケート調査により、子ども同士の人間関係において、年齢ごとに意識されていることは違い、0 歳児では、保育者との信頼関係の形成や心身ともに安心できる配慮に関する回答数が多く、5 歳児では、自分に自信を持てるような配慮やルールのある遊びを行っていた。このような年齢によって結果に差が生じていることから、発達段階に沿った援助がされていることが分かる。乳児期において、人間関係形成という課題の土台として、園での生活の安定や人への信頼感を形成することが重要であるが、幼児期にも形成し続けるものであることが分かる。子どもたちを認めることで、保育者は理解者として存在し続けなければならない。理解者の存在をいつも確認できることで、安定した友達関係の形成が可能になるのである。

IV 参考文献

石田 玲音 瀧川 光治 武田 俊昭 (2002)「幼児の発話と行為から見た同年齢間の受容・被受容関係 ―ある 4 歳新入園児の第一保育期の観察から―」聖和大学論集 教育学系 (30), 73-88

田中 裕子 (2013)「日常保育における幼児同士の人間関係を育む試み ―ソーシャルスキルトレーニング(SST)の技法を用いて―」愛知教育大学幼児教育研究 17,49-56

「幼稚園教育要領解説」文部科学省 (2008)

「保育所保育指針」厚生労働省 (2011)